

新着案内

町田の文学

第41号 2019.2.1 発行 町田市民文学館ことばらんど

〈貴重雑誌をめぐる物語〉

文学館の貴重書庫には、文学史的に重要な雑誌や、町田ならではの地域文芸誌など、約八三〇タイトルの、一万冊余が所蔵されています。日頃、あまり目に触れることのないそれらの雑誌から、主なものを順次ご紹介いたします。

その一

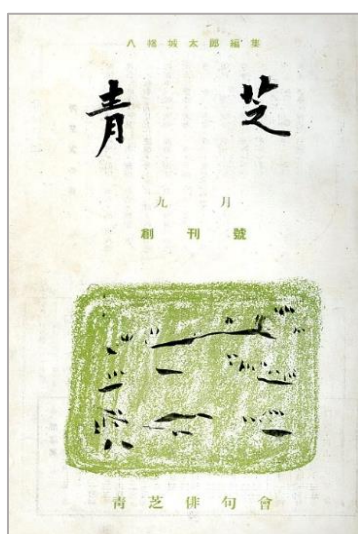
俳句雑誌 「青芝」

編者…八幡城太郎

発行所…青芝俳句会 月刊誌

所蔵巻号…一九五三年（昭和二八）九月号

（創刊号）



「青芝」創刊号
1953年9月発行
日野草城の「青芝」にまつわる
エッセイも掲載されている。

「青芝」の誕生

蒲池敏一、田中冬二、野田宇太郎、児童文学作家の那須辰造、俳句研究の高木蒼梧など数多くの文人墨客が眠り、境内には彼らの句碑や詩碑、さらには「武相困民党発祥之地」の記念碑なども建立されていて、知る人ぞ知る文学散歩スポットともなっています。

なぜ、このお寺に多くの文人が集うようになったのか。その答えは、前任職で俳人の八幡城太郎（一九一二〜八五年）が主宰した俳句雑誌「青芝」にあります。

JR横浜線町田駅の南、境川を越えてすぐの相模原市上鶴間にある日蓮宗の古刹、通称谷口の青柳寺。このお寺の墓苑には、俳人であり作家の石川桂郎や真鍋呉夫、詩人の乾直恵、

「青芝」は、昭和初期の新興俳句運動を主導した俳人、日野草城を師とする八幡城太郎が、一九五三年（昭和二八）九月に創刊し、今年の一月号で第七八二号を数える青芝俳句会の結社誌です。当時、長く病床にあった師を慰めるために、創刊を思い立ったとも言われています。

「青芝友の会」とは

創刊号巻頭に置かれた「編集者の言葉」には、城太郎の人となりや初の主宰誌に込める思いがよく表れていますので、少し長いのですが、書き写しておきましょう。

「草城先生の第二句集『青芝』の名を戴いて、このたび創刊することになりました。先輩諸氏の御支援と、会員の協力に依つて、立派な青芝に育てあげたいと思つてをります。／わたしは所謂主宰者でも指導者でもありません。青芝の一人であり、編集責任者にすぎません。お互に青芝人同士では、先生呼ばりはほしくないことにしたいものです。／青芝では、庶民の生活感情を咏ひあげたいと思ひます。われわれグループの傾向として（ことにわたしは）巧みな句を作ることに専念して、内容の空疎な作品を作り勝ちです。その傾向を青芝に持ち込まないやうにしたいものです。すこし位下手でもいい、内容の充実したものを生み出してゆきたい。（中略）／又、青芝友の会に参加して下さった方は、それぞれの分野に於て、立派な仕事をなさつてある文化人です。次々に、それぞれの方面の作品を、青芝に寄せて下さることになつてをります。」

後段にある「青芝の会に参加して下さった方達」というのは、創刊第二号に当たる一〇月号の巻末奥付上に、「青芝友の会」として名前が掲げられている四三名の人々のことです。墓苑に眠る文人として冒頭でご紹介した以外の主要な名前を挙げると次のような人々です。俳人の安住敦、秋元不死男、飯田九一、角川源義（角川書店創業者）、詩人の岩佐東一郎、扇谷義男、近藤東、笹沢美明（ミステリー作家・笹沢左保の実父）、能村潔、八十島稔、歌人の津軽照子、宮柁二、作家では福田清人、細田源吉、正岡容、国文学者の荻野清、書物研究の斎藤昌三、版画家の川上澄生など。

その後、「青芝友の会」の名簿は、逝去や新たな参加による更新を繰り返して、一九八五年（昭和六〇）四月一日発行の第三七七号「八幡城太郎先生追悼号」の五一名まで毎号巻末に掲載され、実に延べ一〇九名の文化人が名前を連ねることになります。

この間に名簿に録された主な名前としては、俳人の池上浩山人、小寺正三、詩人の井出文雄、江間章子、大江満雄、木原孝一、沢木隆子、城左門、平野威馬雄（料理研究家・

平野レミの実父）、藤原定、藪田義雄、山本和夫、作家の打木村治、北林透馬、小林清之介、八木義徳、和田芳恵、和田傳、国文学者の乾裕幸、井本農一、鶴月洋、尾形仂、山下一海、地域史研究の安西愈、「日本古書通信」の八木福次郎など、錚々たる人々です。「青芝」は一俳句会の結社誌でありながら、こうした「それぞれの分野に於て立派な仕事をなさつてある文化人」が、各号に詩や随筆、評論等を発表する文芸誌的な側面を色濃く持っていました。

もう一つ、「青芝」の資料的価値として注目したい点は、同人や「青芝友の会」のメンバーはもとより、創刊以前に彼らと深いつながりがあった文学者についても、機に臨んで律儀に追悼特集を組んでいることです。

第二次大戦中、東京大空襲で亡くなった俳人・高篤三（第七号／正岡容ほか）、ビルマで戦病死した詩人の高祖保（第一五号／田



左：高篤三追悼号
右：高祖保追悼号

中冬二ほか)、乾直惠(第五六号/伊藤整、春山行夫、室生犀星ほか)や城左門(第二八〇・二八一号/藤原洗、堀口大學ほか)など、その人物を知るうえで、貴重な文献となりうる追悼特集がいくつもありません。

八幡城太郎という人物

では、こうした八幡城太郎の幅広い人脈は、いつ、どのように形成されたのでしょうか。特に、多彩な詩人たちとの交友には興味をかきたてられますが、これらの点は、まだ必ずしも十分に明らかにされていません。

一九一二年(明治四五)、寺の次男坊として生まれた城太郎には、早稲田の国文科に学んだあと、映画監督を夢見て、横浜界隈を彷徨した青春時代があります。小説家の北林透馬らに兄事するとともに、



八幡城太郎
(1912~1985)

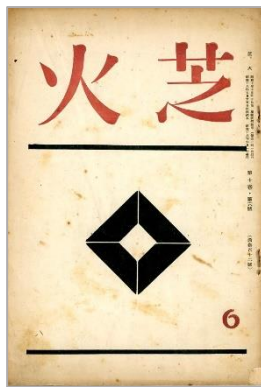
三五年(昭和一〇)頃から俳句を始め、一期、大野我羊が横浜で三二年(昭和七)に創刊した俳誌「芝火」の編集を担当していたようです。昭和一〇年代後半のことで、この頃の「芝火」には、高祖保や高篤三のほか、当時福岡で発行されていた文学同人誌「こをろ」の中心メンバーである真鍋呉夫や矢山哲治、島尾敏雄なども執筆しています。四二年(昭和一七)七月の「芝火」一二五号には、のちに「青芝友の会」の中心メンバーとなる人々がこぞって寄稿しているのです。すでにこの頃から城太郎と彼らには親交があったことがうかがえます。真鍋が、同じ「こをろ」の仲間である島尾敏雄を伴って来て、町田で一々歓迎の句会が催されたのもこの頃のことでした。

城太郎は、一九四二年(昭和一七)、兄の急逝でやむなく僧籍を継ぐことになるのですが、その文芸に対するひたむきな情熱と、潔癖で人情に篤い人柄とが、後年「青芝友の会」に集い、彼を支える多彩な人物との深い交友を育むことになったようです。毎年四月二九日の天皇誕生日には、彼らを招いて青柳寺で「竹の子句会」が催され、高得点句の賞品には境内にある竹林の見事な竹の子が供されたと言います。

八幡城太郎を中心とする「青芝友の会」は、

当時あたかも武相地域の「文芸サロン」のような役割を果たしていたのです。そんな城太郎の生涯と青柳寺に集う人々については、俳人山本つぼみ氏による好著『評伝 八幡城太郎』(角川書店 一九九五年)、『笹童子 青柳寺に眠る文人たち』(同二〇〇〇年)がありますので、関心のある方にはご一読をお薦めします。

なお文学館としては、所蔵の「青芝」創刊号から城太郎追悼号(第三七七号)までの詳細な「総目次」と「執筆者索引」を、是非ともまとめておきたいと考えています。



- (上)「芝火」当館では8冊を所蔵。
- (左)「青芝」377号(1985)八幡城太郎先生追悼号



新刊紹介

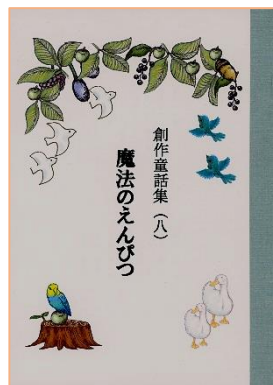
寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」をもとに作成しています。

『創作童話集（八） 魔法のえんぴつ』 童話創作の会『魔法のえんぴつ』／著 2018.11

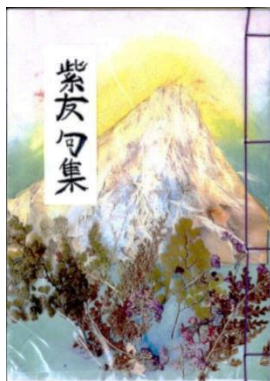
魔法のえんぴつ

2009年、町田市公民館での「童話創作実践講座」受講生によって立ち上げられたサークル。指導者は町田ゆかりの児童文学作家、国松俊英氏。

年に一回のペースで発行される童話創作サークル「魔法のえんぴつ」創作集の八冊目（当館には二号から收藏）。指導の国松俊英氏からの「書き続ければ感性は磨かれます」「物語を書いてみようという意識が働いているときは、タネがみつかります」という言葉を励みに、続けているという。バラエティに富む、七編の童話を収録。



『町田立教会・紫友句会 五十回記念 紫友句集』 町田立教会・紫友句会／著 2018.10



二〇一三年（平成二五）から定期的に行われた句会の記録集。会員一三人のプロフィールと代表作、毎回の点盛りの結果、選評などが丁寧に記録されている。装幀には押し花があしらわれ、和綴じで装本されるなど、思いのこもった句集である。

町田立教会・紫友句会

町田在住の立教大学卒業生による「町田立教会」の中の句会。当館のほか、市のコミュニティーセンターなどで活動している。

【主な寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」

詩誌：「璞（あらたま）」「構図」

短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「罌（こだま）」

「山暦（さんれき）」「都市」「風土」「波」「俳句界」

「蒼茫（そうぼう）」「八千草」

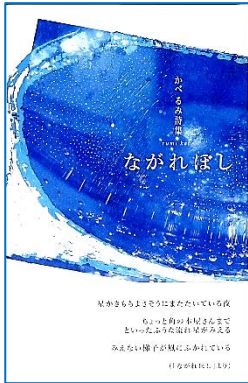
その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」をもとに作成しています。

『ながればし かべるみ詩集』

かべるみ／著 ふらんす堂 2018.11



あながきによれば、小学生の頃、詩を書く宿題があり、星のまたたく夜空を見つづけていたという。「そのとき、自分のなかに言葉が自然にわき上がり、流れ星のように降りそそいでくるふしぎな感覚がありました」。

著者にとつての第五詩集である本書の作品は、宇宙とは、「ひと」の中にある、ということ、ゆつくりと感じさせる。三・一後に書かれた一群の詩も心を揺さぶる。

かべ るみ

「オルフェ」同人を経て「はそうの会」「ティルス」同人。日本現代詩人会会員。著書に『時のてのひら』『楳』『十姉妹』『羽』がある。町田市在住。

『スーパーカブ 4』

トネ・コーケン／著 KADOKAWA 2018.12

トネ・コーケン
「エンジンオイルはずっとホームセンターで4リットル千円くらいの鉱物油を使っています」（あとがきより）とのこと。

スーパーカブと生きる女子高生、子熊の物語の第四巻。もうすぐ卒業の冬に、子熊は思いがけない出会いや経験を重ねる。カブがもたらした人とのつながり…。

だがトネはあとがきにこうも記している。「バイクが人間関係を広げるものだとしても、僕のようにそこから零れ振り落とされる人間は居る。そうなたら一人でもけっこの何とかなるものです」これからの展開が楽しみになる一文だ。

韓国語版も出た！



世界の果てで生き延びろ —芥川賞作家・八木義徳展—

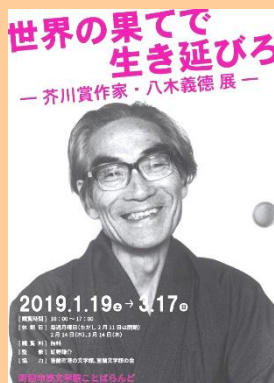
展覧会開催中

2019年3月17日(日)まで

10:00~17:00 入場無料

休館日：毎週月曜日(2/11は開館)と第2木曜日
展示解説：2/13(水)、2/28(木)、3/17(日)

14:00~(40分程度) 申込不要



新刊紹介

町田ゆかりの作家新着本から



『永遠のマフラー
作家生活 50 周年記念短編集』
森村誠一／著
KADOKAWA 2018. 10



『うつくしいもの
八木重吉信仰詩集』
八木重吉／著
日本キリスト教団
出版局 2018. 9



『一私小説書きの日乗
新起の章』
西村賢太／著
本の雑誌社 2018. 11

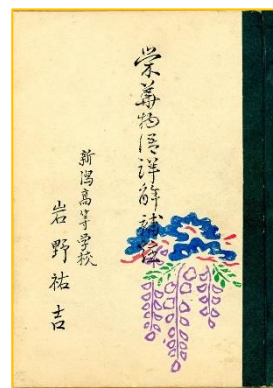


『あとがき』
片岡義男／著
晶文社 2018. 10



『女が死んでいる』
貫井徳郎／著
KADOKAWA 2018. 8

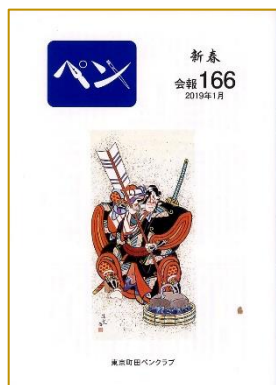
そのほかの新着本から



『栄華物語詳解補注』
岩野祐吉／著 1954. 4

平安後期の歴史物語『栄華物語』詳解の補訂についての研究書。町田在住のご遺族から寄贈された。

本書は謄写版の私家版と思われるが、1999年にクレス出版から刊行されている。



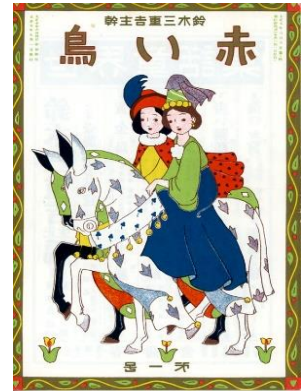
会報「ペン」166号
東京町田ペンクラブ／発行 2019.1

「ペンの会」創立メンバーである八木義徳を特集。正子夫人へのインタビュー、当館で開催中の八木展担当学芸員伊藤あやの寄稿が掲載されている。

特別閲覧雑誌。無料配布も若干数あり。

新収蔵の貴重雑誌

『赤い鳥』



『赤い鳥』創刊号
1918年7月刊行

大正から昭和初期にかけて、日本の児童文学・文化に大きな足跡を残した、童話童謡雑誌『赤い鳥』の復刻版全巻が貴重雑誌として登録・保存されました。館内で閲覧ができます。

『赤い鳥』は一九一八年（大正七）、鈴木三重吉によって創刊されました。当時出版されていた子ども向けの読物や雑誌は俗悪なものが多いと嘆いた三重吉は、『赤い鳥』創刊について「世間の小さな人たちのために、芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起したいと思いついて、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰発行することに致しました」と述べています。

執筆したのは、芥川龍之介、森林太郎（鷗外）、島崎藤村、有島武郎、小川未明、新美南吉、宇野浩二、内田百閒

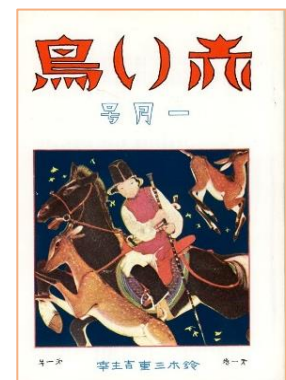
など、当時の錚々たる作家たちでした。掲載された作品の中には、今でも読み継がれている『蜘蛛の糸』（芥川）、『一房の葡萄』（有島）、『月夜と眼鏡』（小川）などがあります。

童謡は北原白秋が監修し、西條八十などが作品を寄せ、白秋の下で、与田準一、巽^{たのみ}聖歌、清水たみ子などの詩人が育ちました。そのほか童謡に曲を書いた山田耕筰、成田為三、劇作家・小山内薫なども執筆しています。

優れた表紙絵、挿画も『赤い鳥』を特徴づけるもので、表紙画のほぼすべてを担当した清水良雄をはじめ深沢省三、鈴木淳、武井武雄、川上四郎などが優れた作品を掲載しました。

また、『赤い鳥』は子どもたちから綴り方や自由詩、自由画を募集し、三重吉が綴り方の、白秋が自由詩の選に当たりました。子どもの表現する力を伸ばす上でも大きな功績があったと言われています。

一九二九年（昭和四）三月に休刊し、三一年復刊、三六年（昭和十一）、三重吉の死によって終刊を迎えます。休刊



『赤い鳥』1931年1月号
1年9か月間の休刊後の復刊第1号。

の時期をはさんで一六年間、九六冊が刊行されました。それぞれが読み応えのある作品であり、モダンな挿絵に彩られています。

目次をご覧いただくだけで、「こんな人も書いていたのか」という新鮮な驚きがあることと思います。知っているようで知らない『赤い鳥』の世界をお楽しみください。このほか、同時期に刊行された『おとぎの世界』『金の星（金の船）』『童話』など、児童雑誌の復刻版もご覧いただけます。



『赤い鳥』
鈴木三重吉追悼号
この号をもって終刊。

ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。



街頭紙芝居 が やってきた!

ミニ展示シリーズ第五弾として、街頭紙芝居をご紹介します。街頭紙芝居とは、自転車に乗った紙芝居屋が公園や原っぱなどに子どもを集めて駄菓子を売り、上演した紙芝居です。

今回展示するのは、戦後に聖和社が制作した「てる坊」という作品。人間の男の子・てる坊のドタバタの日常や擬人化された動物たちと繰り広げる冒険譚、江戸時代を舞台にしたものから西遊記になぞらえた連作「珍遊記」シリーズまで、手を替え品を替え様々な物語が生み出されました。

作者名は「竹下実」「坂のぼる」や「坂上のぼる」など巻によって異なり、詳しいことはわかっていません。資料が散逸してしまっているため謎が多い作品ですが、七一六巻まで存在していることが確認されており、人気のシリーズだったことが窺えます（当館では、第四一巻から第六三四巻までのうち計二二巻所蔵）。この機会に、子どもたちを魅了した街頭紙芝居をぜひお楽しみください。

●街頭紙芝居がやってきた！ 展示中~2019/3/17

●わたなべゆういち「ねごごかな」シリーズ原画展 2019/3/19~4/21

2019年度お宝紹介展示(サロン) 予定

(タイトルは仮題です。詳細日程が決まり次第お知らせします)

- 遠藤周作自筆原稿 (4/23~5/12)
- 神蔵器展 (5/14~7月中旬)
- 西村宗「サラリ君」展
- おぼまこと展
- 作家の手紙展

サロン
お宝紹介
展示予定

「町田の文学」第41号 2019年2月1日発行

編集・発行/町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 町田市原町田 4-16-17 TEL 042(739)3420

FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター

Twitter@machida_kotoba



*この冊子は350部作成し、1部あたりの単価は105円です(職員の人件費を含みます)